

第三回ふくふく童話大賞「大賞」

小さなお客さん

洋裁店のハルさんは、このところ注文がなくてこまっています。

「不景気だもの。だれも、服を作ろうなんて、おもわないのね。」

シヨールウィンドーにはりつけた、

「子ども服 婦人服の、お直し致します」のはり紙がすっかり黄ばんで、今にもはがれそうです。

「お直し出張致します、とでも、書きなおそうかね」

ハルさんが、ため息まじりにそうつぶやいた時、強い風が立ったのか、はり紙はとんでいってしまいました。

ハルさんは、しばらく、ぼーっとしていましたが、電話のベルでわれにかえりました。

「はい、ハル洋裁店です」
返事がありません。

「もしもし？」

受話器のむこうで、風がわたるような音がしました。やがて、とても小さな声が、こう言いました。

「あのう、子どもでも、服直してくれますか？」

「ええ、もちろんですとも」

「これから、行ってもいいですか？」

「ええ、ええ。お待ちしていますよ」

ハルさんは、上機嫌で電話をきりました。

しばらくすると店の前に、小さな人があらわれました。

「ごめんください」

入ってきたのは、小さな男の子です。

「お電話下さったのは、あなたですね？」

男の子は、こっくりとうなずきました。

「かわいいお客さま、大かんげいですよ。それにしても、み

ごとに破いてしまったわねえ」

ハルさんは、老眼鏡をかけなおすと、さっそく、男の子の服を点検しました。

「めずらしい服なこと。こんな布、見たことがないわ。それに、ずいぶん古いわね」

ハルさんは、男の子の顔と服を、かわるかわるながめながら、
「だいぶいたんでて、あて布が必要ね。だけど、おなじ布が
うちにはないのよ」

と、もうしわけなさそうに言いました。

「直してもらえないんですか」

男の子は、今にも泣き出しそうです。

「いいえ、おなじ布でなくてもいいとおっしゃるのなら、してさしあげますよ」

ハルさんは、あわてて言いました。

「あなたの服に近い色で、いいかしら？」

ハルさんは、棚から、すべすべした深緑色の厚手の布をだしました。

男の子は、こっくんとうなずきました。

「では、服をぬいでもらいましょうか」

今度は、顔色がさっとかわりました。

「着たままじや、だめなの？」

ハルさんは、男の子のこまった顔を見て、すっかり気のどくになりました。

「よござんすよ。人には、それぞれ事情というものが、おありでしょうからね」

男の子には、背中に大きなあざでもあるのだろうと、思いなおしたのです。

「その代わり、動いてはいけませんよ」

ハルさんは、大はりきりで、針に糸を通しました。ひさしぶりの仕事ですもの。胸がわくわくします。

それにしても、この布はなんて変わった布なのかしら。木の葉みたい。

そういえば、いいにおいがするわ。木のおい？それとも森のおい？それに、この子の小ささったら、まるで赤ちゃんだわ……。

不思議におもいながら、針さえ持っていれば、ご機嫌なハルさんです。

そのうち、すっかり服直しに夢中になってしまいました。

「さあ、できたわよ」

ハルさんが、最後の糸を、プツンときりました。男の子は、

きれいになった服を、何度も何度も、なでています。

「ほんとに、ありがとうございます。」

「どういたしまして。深緑色がよくにあって、まるで森の妖精みたいですよ。」

「妖精？　ほんと？　ぼく、妖精に見えるの？　妖精だったら、いいな。妖怪みたいにこわがられずにすむもんね・・・」

「男の子は、夢みるように言いました。」

「えっ？」

「ハルさんが、あわててメガネをずり上げた時には、男の子は

ガラス戸のむこうに消えるところでした。ハルさんは、急いで追いかけました。お金をもらうのを、わすれてしまったのです。けれども、表には、かすかに風がふいているだけでした。

「どうも、ありがとう。おかげで、北へ越しても、寒いおもいをせずにすみませす」

男の子の声が、聞こえました。

次の日の朝、ハルさんはいつものようにシャッターを上げようとして、びっくりしました。あの男の子と、そっくりな子どもたちが、行列を作っていたからです。

「服を直してください。深緑色の、あのすべすべしたすてきな布で、おねがいします」

どの子も、おなじことを言いました。

こうして、ハルさんの棚にあらんだ、深緑色の厚手の布は、ぜんぶ小さな男の子たちの服に、変わりました。

「服を直してください」

最後の男の子が、そう言った時、

「悪いけど、もう布がないのよ」

ハルさんは、気のどくそうに言いました。

男の子の目は、みるみる間に、涙でいっぱいになりました。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

気のいいハルさんは、子どもに泣かれて、おろおろするばかりです。

「代わりに、これなど、どうかしら？　あの布と、材質はまったくおなじなのよ」

男の子は、つよくかぶりをふりました。

「子どもなんだから、少しくらいハデだって、かまわないでしょ？」

「赤では、目立つんです」

「目立つ？」

ハルさんは、おやつとおもいました。

「なら、灰色はどうかしら？」

男の子は、やっぱりくびをふりました。

「わかった。じゃ、十日ほど待ってもらえるかしら？」

「十日も？ そんなに待てません。それじゃ、間に合わないんです」

やれやれ、どんな事情があるのかしらないけど、まにあわないのではこまります。

「わかったわ。でも、ちよつと待つくらい時間なら、あるわね？」

ハルさんは、受話器をとりあげました。

やがて、ハルさんは

「待ったついでに、もう少し、待っていたただけるわね？」
と言うと、車のキーを手にして、どこかへ行ってしまいました。

しばらくすると、ハルさんは、あの布とおなじ布をかかえて、帰ってきました。

「さあ、仕事にかかりましょう」

「わがままをいってすみません」

「どういたしまして。お役にたてて、うれしいわ」

ハルさんは、これが最後の子だとおもいながら丹念に針を運びました。

「腕によりをかけたから、一番の仕上がりよ。当分、破れないわよ」

「嬉しいな。これで、北極にいったって寒くなんかないぞ」

「まあ、たいへん。きのうの子は、北へ越すと言ってたけど、北極だったの？」

ハルさんは、目をみはりました。

「いいえ、たとえばの話です。いろいろ、ありがとうござい

ました。さようなら」

男の子は、あわてて言いました。

「きょうは、朝から楽しい仕事をさせてもらって、ありがとう」

ハルさんも、あわてて言いました。

次の日の朝、ハルさんがシャッターを上げると、一枚の紙きれがはさまれていました。

「きのうは、ぼくたちの服を直してくださって、ありがとうございます。今夜、十二時に、ウガン山の大がじゅまるの下に、きてください」

ハルさんは、紙きれを大切そうに、ポケットに入れました。

その夜、ハルさんは十二時前に家をでて、ウガン山にのぼりました。道すがら、『分譲中』ののぼりが、目につきました。木がずいぶん切りたおされて、あちこちに杭がうちこまれています。

やがて、大がじゅまるの下につきました。久しぶりに見るがじゅまるには、縄がうたれ、枝が、無残に切り落とされています。

「バチあたりなことを」

その時、男の子たちが姿をあらわしました。

「ハルさん、こんなにおそく、よく来てくれました。ぼくたち、どうしてもハルさんにお礼が言いたかったのです。今夜、山原に引っ越します。このがじゅまるは、明日、切りたおされることになっています」

ハルさんは、男の子たちの正体に、うすうす気づいていました。

「ごめんね、ごめんね」

ハルさんは、キジムナーたちの住み家がうばわれてしまったのがつらくて、ただ、あやまり続けました。

やがて、男の子たちは、いっせいに飛びたっていきました。

ひとり残されたハルさんは、がじゅまるをそっとなでてみました。

「長いあいだ、ごくろうさまでしたね」
木肌には、お日さまのぬくもりが、まだのこっているように
した。

當間律子

